

# 老いと ともに

認知症になると記憶障害や理解・判断力の低下などが起きて、うまく食事ができなくなったり、トイレを正しく使えなくなったりすることがある。不安や妄想などの行動・心理症状(BPSD)が出ることも。こうした生活上の支障は、介護する側の工夫で軽減できる。症状に合わせて薬を見直すことも求められている。

## 排泄・着替え「流れ」乱さぬ手助け

「杜の家いちい」は、仙台市の北隣の富谷町にある小規模多機能型居宅介護の事業所だ。介護保険のサービスで、自宅への訪問と、施設への通いや泊まりを一体的に利用できる。登録定員25人の全員に認知症がある。

「杜の家いちい」は、仙台市の北隣の富谷町にある小規模多機能型居宅介護の事業所だ。介護保険のサービスで、自宅への訪問と、施設への通いや泊まりを一体的に利用できる。登録定員25人の全員に認知症がある。

「杜の家いちい」は、仙台市の北隣の富谷町にある小規模多機能型居宅介護の事業所だ。介護保険のサービスで、自宅への訪問と、施設への通いや泊まりを一体的に利用できる。登録定員25人の全員に認知症がある。

## 向精神薬は副作用も

認知症のBPSDに対し、精神症状のための薬(向精神薬)がよく使われている実態がある。

医師の76%、地域のかかりつけ医の67%、興奮には専門医の69%、かかりつけ医の64%だった。不眠、妄想、幻覚、怒りっぽい、暴言、不安症状への使用もそれぞれ50%を超えていた。

「ふだんの生活の中で本人が困っている状況があると、介護者への暴力などにつながりかねない。それを改善することで本人はイライラしなくなり、暴力にまで至らないようになります」と語る。

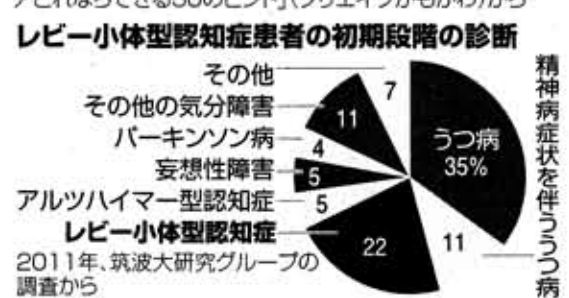
# 認知症「つまずき」なくそう



いずみの杜診療所のデイケア。職員(右端)と語る夫婦は認知症で、系列のグループホームで暮らしながら、週3回通う=仙台市泉区(画像の一部を加工しています)



- 排泄ケアのポイント
- 排泄パターンを知っておく → 2時間おき、食事の1時間後など
  - トイレの表示をわかりやすく → ドアに「トイレ」など書いた紙を貼る。部屋から離れているときは「トイレはあっち→」などと壁に貼って誘導
  - テープで目印 → 立つ位置や座る位置に目印をつけると、自然に近づける
  - トイレの照明をつけ、ドアも開放 → 夜や暗い時も気づいて行きやすい



研究班は13年、「BPSDに対応する向精神薬使用ガイドライン」を公表した。向精神薬の中でも、転倒などの副作用が出やすい抗不安薬については「原則使用すべきではない」と提唱している。興奮や攻撃性などを抑えるために使われる抗精神病薬は「転倒・骨折のリスクを高める」として、使う場合は副作用のリスクを本人や家族に伝え、重い副作用が出たら中止することを求めている。

## 数字の話

国立がん研究センターが4月に発表した予測では、今年の国内のがん死亡者は約37万人。昨年に比べて約4千人増えた。今年新しくがんと診断される罹患者は約98万人で、昨年に比べて約10万人増加した。

## 新規がん患者98万人

3年分までしか公表されていない。現在の動向を予測することで、がん対策に役立てるねらいがある。種類別では肺がんが大腸がんの罹患率が増加し、センターは高齢化の影響が大きいとみている。高齢化の影響を除いて分析すると大腸がんは横ばい、男性の肺がんは減少という。がん対策に詳しい東京大の中川恵一准教授(放射線科)は「高齢化でがん患者の数が増えるだけでなく、認知症などがある高齢者のがん治療をどうするかの問題が大きくなる」と指摘する。がんを治療するための入院によって、認知症が悪化する可能性があるからだ。高齢のがん患者の増加に対し、中川さんは放射線治療の活用を提案する。体を切らないため、高齢者にも向いている。日本放射線腫瘍学会の調査によると、放射線治療を受けた新規患者数は10年時点で約21万人と、年々増えている。

◇「どうしました」と「豆医学」は休みました。

# 医療

kenko@asahi.com

火曜掲載